

FDルーブリック【2025年7月版】

カテゴリー	観点	科目レベル/ 授業レベル	説明	レベル0	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	用語
設計	全体目標とカリキュラム（プロセス）の把握	科目レベル	科目を設計する上で、科目とディプロマ・ポリシーとのつながり（カリキュラム上の科目の位置づけや役割、科目の到達すべき目標）を把握・理解する必要がある。 ※カリキュラム上の位置づけや役割を理解するためには、DP、CP、カリキュラムマップやツリーなどを参照する必要がある。	科目に関わるDPを把握していない/科目を受け持ったことがない	各学部学科等が設定した DPに基づいて 、科目・授業を設計している	科目に紐づいている DPと科目の到達目標との関係性 を理解し、科目・授業を設計している	レベル2に加え、科目の カリキュラム上の位置づけ を踏まえて、科目・授業を設計している	レベル3に加え、DPの達成度評価等のデータを活用し、科目・授業を設計している	※ディプロマ・ポリシー（DP）〔卒業認定・学位授与の方針〕：各大学、学部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標（学修目標）ともなるもの。 ※カリキュラム・ポリシー（CP）〔教育課程編成・実施の方針〕：ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施するのかを定める基本的な方針。 ※カリキュラムツリー：カリキュラムにおける履修の体系性を示すため、授業科目相互の関係や学修の道筋等を表した図の総称。表現する形や内容により、履修系統図やコースツリー、カリキュラム・チャートとも表現される。学生と教職員がカリキュラム全体の構造を俯瞰できるようにすることで、体系的な教育課程の編成・実施や履修を促す意図を持つ。
設計	全体目標とカリキュラム（プロセス）の把握	科目レベル	科目を設計する上で、科目とカリキュラム上の位置づけや役割を把握・理解する必要がある、特に前後に開講される科目や関連する科目とのかかわりが重要となる。前後の科目や関連する科目の内容把握とともに、それらの担当教員との協議を行うことで、より内容の充実が図られる。 ※前後の科目を把握・理解するためには、CP、カリキュラムマップやツリー、履修モデルなどを参照する必要がある。加えて前後や関連する科目の内容を把握するためには、当該科目のシラバスの精読に加え、それらの担当教員との協議が必要となる。 ※教員の協議方法として、教員同士で議論、内容調整、授業参観、ピアレビュー、コンサルティングを行うことが想定される。	科目の前後に開講されるあるいは関連する科目を把握していない/科目を受け持ったことがない	科目の前後に開講されるあるいは関連する 科目の位置づけ をカリキュラムポリシーやカリキュラムツリー等で 把握し 、科目・授業を設計している	レベル1に加え、科目の前後に開講されるあるいは関連する 科目の内容をシラバス等で把握し 、科目・授業を設計している	レベル2に加え、科目の前後に開講されるあるいは関連する 科目の担当教員と協議した上で 、科目・授業を設計している	レベル3に加え、科目の理解度（前後・関連科目を含む）等のデータを活用し、科目・授業を設計している	※カリキュラムマップ：学生が身に付けることが期待される知識・技能・態度等、学修目標として示される項目と授業科目との間の対応関係を示した図の総称。学生と教職員がカリキュラム全体の構造を俯瞰できるようにすることで、体系的な履修を促す意図を持つ。学修目標と各授業科目の対応に加え、授業科目の目標や、開講学期等と組み合わせてマトリクス形で示されるものが多くみられる。カリキュラムマップのうち、特に順次性や授業科目間の関係性を示すことを重視して、チャート型等で示したものは、カリキュラムツリーと呼ばれる。
設計	学修目標とその評価方法	科目レベル	授業内容や到達目標と照らした、学生に対して説明できる適切な成績評価を設定する必要がある。 ※成績評価方法は、素点（100点）を評価する方法であり、例えばレポート50%、小テスト25%、課題25%などの割合を設定することが想定される。 ※成績評価基準は、可否や秀優良可・不可を示している。	成績評価方法を設定しているが、到達目標と対応しているか判断できない/科目を受け持ったことがない	到達目標と対応した成績評価方法を設定している （例、レポート50%、課題50%）	到達目標と対応した成績評価方法と基準を設定している （例、レポート50%：Sは〇〇[50%]、Aは〇〇[40%]、Bは〇〇[30%]…。課題50%：Sは〇〇[50%]、Aは〇〇[40%]、Bは〇〇[30%]…。）	成績分布等のデータ（他の科目を含む）を参照しながら、到達目標と対応してした成績評価方法と基準を設定している		
設計	授業設計（シラバス作成）	科目・授業レベル	科目の役割を理解し、法令や学則等の意図を把握した上で、各回の授業設計を行う必要がある。 ※科目の計画を学生に示すのがシラバスである。シラバスでは、例えば、教員が行う15回の授業内容の計画のみならず、科目全体の計画を学生が理解できるよう授業時間外の学修も記載する必要がある。	シラバスの作成要領を十分に確認せずに作成している/シラバスを作成したことがない	シラバスの作成要領等に基づき、適切に作成している	学則等の学内規程に加えて、法令等の根拠を理解した上で、作成している （例、大学設置基準等を踏まえた、授業時間外学修に対する理解）	学修を促す工夫をシラバスの中に反映して作成している （例、時間外学習の明確な指示や参考書の活用方法等）	レベル3に加え、理解度や授業時間外の活動時間、成績分布等授業に関連するデータを参照しながら作成している	※シラバスの各項目の意味：法令的な意味を想定しています。（例えば、単位の意味や授業時間外学習の意味等）
実施	学習指導法	授業レベル	授業目標を到達するためには、科目の設計を行い、その内容に対して適切な教授法を選択し、改善を行う必要がある。 ※学生の状況に応じて改善するためには、学生の状況を把握する必要がある（「学修状況の把握」に関連）。 ※教授法は、講義法、アクティブラーニング、グループワーク、適切な事前事後課題の設定と学習実績の把握などが想定される。	適切な教授法であるか判断できない/科目を受け持ったことがない （例、アクティブラーニングを大学から指示されたので導入した）	限られた教授法を用いて、授業を実施している	様々な教授法を習得しており、適切な教授法を選択し、授業を実施している	様々な教授法から適切なものを選択した上で授業を実施し、学生の反応や理解の状況に応じて応じて最適化することができる		
実施	学修状況の把握	授業レベル	授業の到達目標を達成するためには、授業実施期間の途中に学生の学修状況を把握し、必要に応じて改善を行う必要がある。これは、すべての授業形態において共通である。 ※授業形態には、大人数・少人数、講義・実験、オンライン・対面等が含まれる。 ※改善には、教員が改善主体となる授業内容や教授法の改善、学生が改善の主体となるフィードバックがある。 ※フィードバックには、様々な方法があるが、例えば大人数であれば全体に対するフィードバック、少人数ではれば個別のフィードバックが想定される。	授業期間の途中では、学生の学修状況は把握していない/科目を受け持ったことがない	授業期間の途中に学生の学修状況は把握しているが、問題点等をどのように改善すればよいかは判断できない	限られた授業形態で、授業期間の途中に学生の学修状況を把握し、問題点等があれば当該期間の授業改善に役立てることができる	授業形態によらず、授業期間の途中に学生の学修状況を把握し、問題点等があれば当該期間の授業改善に役立てることができる		
点検・評価	授業見直し	科目レベル	授業改善を行う上で、学生からのアンケート結果や成績評価の分析等から課題を把握し、翌年度の改善等に活用する必要がある。	アンケート結果や成績評価等を活用できてない/科目を受け持ったことがない	アンケート結果や成績評価等から課題を把握しているが、どのように改善すればよいかは判断できない	アンケート結果や成績評価等から課題を把握しており、指摘された内容のみを改善している	アンケート結果や成績評価等から課題を把握しており、顕在化した課題を改善している	レベル3に加え、他科目との関連を意識しながら改善している	

※科目レベル：授業全体 / 授業レベル：1回の授業